ジェンダーへの取り組みの良い事例（参考）

事　業　情　報

- 国名：インドネシア、タイ、スリランカ、モルディブ
- 事業名： スマトラ沖大地震・インド洋津波災害に対する国際緊急援助隊派遣並びに緊急援助物資の供与
- 期間：２００４年１２月～２００５年３月（約３ヶ月）

１．事　業　概　要

（１）背景・経緯

２００４年１２月２６日にインドネシアのスマトラ島沖でマグニチュード９．０の地震が発生した。これにより津波が発生し、インドネシア、スリランカなど９カ国において、死者・行方不明者約３０万人、被災者約５００万人の被害が出た。

（２）事業の目標と活動

人的援助としてインドネシア、タイ、スリランカ、モルディブの４カ国に国際緊急援助隊（救助チーム、医療チーム、専門家チーム並びに自衛隊部隊）を派遣し救援活動に当たるとともに、必要な緊急支援物資供与を行う。

２．日本側関連活動・協力

（１）インドネシア

① 緊急援助隊事前調査

② 医療チーム（１次隊～３次隊）、自衛隊及び支援要員、アチェ市内で活動。

③ 緊急援助物資供与２，６００万円相当（テント、毛布、発電機、コードリール、スリーピングマット、簡易水槽、浄水器、ポリタンク等）

（２）タイ

① 医療チーム（タクワパー郡、山岳地帯巡回診療、難民キャンプなどに分かれて活動）

② 救助・ヘリチーム（プーケット、ピピ島、タクワパー郡にて活動）

③ 専門家チーム（クラビ地域で鑑識活動もしくはタイ捜索救助チームへの技術指導）

④ 緊急援助物資供与１，０００万円相当（テント、毛布、浄水器、発電機、コードリール、医薬品）

（３）スリランカ

① 医療チーム（１次隊～２次隊）東部アンパラ県にて活動。

② 専門家チーム（復旧・復興）

③ 緊急援助物資供与１，５００万円相当（テント、スリーピングマット、プラスチックシート、浄水器、発電機、簡易水槽、コードリール、毛布）

（４）モルディブ

① 医療チーム（ムリ島）

② 専門家チーム（復旧・復興）

③ 緊急援助物資供与１，０００万円相当（テント、毛布、発電機、ポリタンク、コードリール、簡易水槽）

３．事業におけるジェンダー配慮の実施

●　多様な文化・社会に配慮した援助実施体制の構築

（１）ジェンダーの視点を持った派遣隊員の決定

緊急援助隊事務局は、これまでの業務の積み重ねから、イスラム圏では災害時においても女性が外に出て来て、治療や診察を受けることがないということを認識していた。このため、イスラム圏のインドネシアとモルディブに緊急援助隊を派遣するに際して、こうした女性患者にも直接アプローチできるよう女性の医師や看護師の派遣を心がけた。

インドネシアの医療チーム２次隊では４名の医師のうち２名を女性、モルディブは１０名の団員のうち、４名を女性とするよう努力した。こうした工夫を講じたことにより、受診者の男女比率は、インドネシアでは１１：９、モルディブでは１：１となった。

（２）ジェンダーの視点を持った緊急援助隊医療調整員の確保

緊急時となると、ともすると抜け落ちやすいジェンダーへの関心や認識についても、女性の視点が加わることで、よい援助方策が得られることがある。このため、緊急援助隊事務局では、活動に参加する女性業務調整員の積極的育成・確保を目指している。女性調整員確保比率が増加し、３０％を超えるようになった。

参考：「スマトラ沖大地震」及び「インド洋津波」対応派遣隊員内訳

- 緊急援助隊員（延べ人数）
  合計：２４８名、男性１８４名（７４％）、女性６４名（２６％）
- 医療調整員及び業務調整員
  合計：５９名、男性４４名（７５％）、女性１５名（２５％）

（３）「救援活動マニュアル」へのジェンダー配慮項目の記載

被災地でのジェンダー配慮や治療・診療機会の男女平等を意識した活動は徐々に実績を積んできている。これら知識や教訓が何

時でも役立てることができるよう、改訂中の活動マニュアルに特別記載を行う予定である。

● 裨益効果・受益者における公平性の確保

（4）文化・社会習慣や男女の力関係に留意した援助者側からの働きかけ

スリランカでは、患者たちが、症状の如何に関わらず、男性患者が、列の前の方に並ぶ一方、女性患者は、列の後ろの方に固まって並び、診療を待っていた。そこで、診療・治療機会と順番におけるジェンダー格差を是正するために、男女別に受診希望者が並んで待機するような措置を講じた。また、性差によるプライバシーの確保を目的として、仕切りで隔離した診療スペースを確保した。これは、身体的なことにかかる言及や接触に対して、特に、強い羞恥心を抱きやすい女性が、心理的に診療を受けやすくするためである。